

松下村塾記の分割

次に、第七章の「松下村塾」を例にとつて述べてみたい。

三 松下村塾の教育の枠組み

松下村塾記から教育の枠組みに関係する所を抜き出してみると次のようになる。

補足説明のための資料(明朝体太字)

資料の出典とページ数を漢数字で記載

【資料】 「松下村塾記」(丙辰幽室文稿) 安政三年(一八五六)九月四日

全集第二巻P四三五

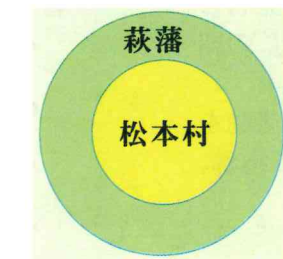
…前略…今松下は城の東方にあり。東方を震と為す。震は万物の出づる所、又奮発震動の象あり。故に吾れ謂へらく、萩城の將に大いに顕はれんとするや、其れ必ず松下の邑より始まらんかと。

【注釈】…前略…今松本村は萩城の東の方向にある。易では東方を物事の震源としている。震は万物の芽生える所あり、又ふるい動かす兆でもある。だから、私が思うには、萩城(萩藩)が將に榮えようとするのは、必ずこの松本村からであると。他と区別したり、強調する所には傍線を引いた。

資料の意味・内容を分かりやすく「注釈」という形で現代語に訳して理解を深めるようにした。

傍線の部分がポイントとなるが、松陰は萩藩が榮えるためには、五経の中の易経を使って城の東方(万物の芽生える・ふるい動かす)の自分(松陰)が生活している松本村から事を起す、即ち自分の足下から改革していこうという考えである。それは、下図のように、萩藩の輪の中に松本村があるという図式が描ける。

注釈の補足で、松陰は立場を重要視し、松本村の住人として、足もとから改革を行う事を考えた。



余曰く、「学は、人たる所以を学ぶなり。塾係くるに村名を以てす。誠に一邑の人をして、入りては即ち孝悌出でては則ち忠信ならしめば、則ち村名これに係くるも辱ぢず。」…略…(全集第二巻P四三六〜四三七)

【注釈】「学は、人たる所以を学ぶなり、というのが松下村塾の教育目標であり、学問は人間形成(人格・能力を磨くこと)を行うことである。この松下村塾の名前は村名(松本村)を付けると言うことで、松下村塾は松本村の塾だと言うことである。この松本村の人々が家庭に於いては孝悌、則ち親に孝行・兄弟仲良くし、地域社会に於いては、忠信則ち主君に忠義を尽くし、人々に對しては信義を厚くすることである。このようになれば塾名に村名を掲げててもその名に恥じることはない」と言っている。

これを図式化すると下図のようになる。

【注釈】の内容から教育目標、松下村塾の名前の由来、家庭では孝悌、地域では忠信が読み取れる。



図式化したもの

松陰読本・手引き書の活用について

三十歳の若さで処刑された吉田松陰の生涯と業績について、わかりやすく書いたのがこの手引き書である。

この手引き書を活用することによって次のような事が考えられる。

- 一、公務雑多でゆとりの少ない先生方が「松陰読本」の内容を子ども達に指導する場合、事前にこの手引き書を一読すれば正しく指導できる。
- 二、学校で学んだ子ども達が家庭で松陰の話をする場合、保護者の方が手引き書を一読すれば、その話の補足や誤りの是正が出来、楽しい団欒となる。
- 三、萩市には松陰に関わる史跡があり、ガイドが現在活躍しているが、ガイドの方々が手引き書を活用することによって観光客に松陰の生き様を正しく伝えることが出来る。
- 四、教師や保護者から話を聞いた子ども達が、吉田松陰を誇りに思うと同時に自分の生活を見直し、将来に對し希望や志を持つようになる。
- 五、幕末から明治にかけて活躍した人材を育てたのが吉田松陰である。

多くの人々が松陰の人間性や志、門下生に對する指導の在り方等をこの手引き書で学んでほしい。

執筆者・松風会理事

弘長 純忠